座る人の気持ちを思いやる心。それぞれの思いを込めた最終プレゼン。

今回の作品テーマは「座」ということで、気軽に座ったり触れたりすることの出来る作品が多く、通りがかりの一般の方々も、様々な「座」に興味津々。触れて、杉の手触りを楽しんだり、座ったりし、感触を確かめていた。

震災の影響で、募集スタートが遅れたためその後の時間短縮をはかるため、作者による10分の1スケールの模型製作による2次選考を省いた。そのため、応募されたデザインイメージからいきなり実物大作品の製作へと進むこととなり、作者のイメージを製作側に伝えるのはとても難しいことであった。

製作担当者にとっても、本番当日の舞台で、作者に満足してもらえるのかどうかが一番不安であった。

しかし、現場で実物の作品を見た作者は、その出来映えに驚き、イメージ以上の作品を前に感激しているようであった。製作者もほっと胸をなで下ろした。

この日が完成品との初顔合わせとなる作者もおり、自分たちがイメージしたデザイン画と実物大の作品を見比べ、細部の確認を行った。

スタートを前に、次第に盛り上がる会場の雰囲気を楽しみながら高まる緊張感とともに杉コレクション2011が開幕した。

司会は、すっかり杉コレの看板MCとなった千代田、若杉両氏と地元宮崎のフリーアナウンサー赤間氏との軽妙な掛け合いで、和やかに進んでいった。

作者は、イメージ以上の作品を前に、真剣そのもので、自分が思い描いた作品に込めたコンセプトやイメージを丁寧に説明してゆく。

毎回のことではあるが、杉コレのプレゼンテーションに、ダジャレはつきものとなっている。審査員の方々は、世間で言えば肩書きの前に「一流」とつくほどの著名な方々が揃っているのにもかかわらず、プレゼンテーションでは常に笑いが大切な要素となっている。「笑い」は、プロや素人、大人や子ども、スタッフとギャラリーという垣根を自然に取り除いてゆき、最後には会場全体の緊張も解け、会場にいる全員が楽しい気持ちで、充実感とともに達成感が残った。

今回のテーマ「座」をイメージした作品は、それぞれ、そこに座る人への思いが伝わる作品となっていた。座ることによって感じる感触や座り心地に人の心がどう動くのか、を考えた作品が多かった。

子ども杉コレでグランプリを受賞した「だっこのイス」で小学生の作者が発表したプレゼンテーションには、親を亡くした東北の子どもたちへの「思い」が込められており、その素直な子どものメッセージに会場にいた全員、心が揺さぶられた。

今年は日本にとって特別な1年であった。これほどの多くの悲しみに包まれたあとだからこそ、人の思いがよく響くのかもしれない。

また、杉は、その柔らかさや温かさで人の「思い」を伝えることができると改めて気づかされた。

後日、この「だっこのイス」は、有志によって「東北へ送ろうプロジェクト」として東北の被災地へ寄贈されることとなった。

杉コレクション2011 in 日向

グランプリ作品

お尻合いイス

宮崎市臨時職員 山内成津子・宮崎県

隣に座った見ず知らずの人と、自然と会話が弾む。何度か顔を合わせるうちに知り合いになる。そんな人の温かさを感じるようなイスがお尻の形をしていたら、何だかふふっと笑ってしまいませんか？イスに腰掛けて話しをする事で、人と人との繋がりを感じて欲しいと思います。

杉コレに参加して本当に良かった。もっと沢山の人に、杉コレを知ってもらいたい。

杉コレのチラシを見た日、9ヶ月の娘のお尻を見てこれだ!!と思いました。知り合いにお尻をかけて、お尻合いイス。親父ギャグすぎるかな…ちょっと考えましたが、良い記念になればと思い応募しました。それがまさか、最終選考まで残るとは。連絡を受けた時は本当にビックリしました。

私の製作者は延岡木青会の工藤さん。写メールや電話で、何度も連絡を取りながら作成してもらいました。

最終選考の日、あまりの大事に気が引けました。何より、他の作品が魅力的すぎて、プレゼンが終わった後、何度も帰ろうと思いました。表彰式も自分には関係ないなと思っていたので、名前を呼ばれた時は本当に嬉しかったです。

実は私の原案は円柱に割れ目の線だけを入れた簡単なものでした。それを素晴らしいものに作り上げてくれた工藤さんや、協力者の方々に感謝、感謝です。

杉コレに参加して本当に良かったです。もっともっと沢山の人に、杉コレを知ってもらいたいです。